

編集後記

この特集号を取りまとめている最中に2024年度が始まりました。研究室が立ち上がって13年目。振り返ってみると、多くの個性豊かな配属学生さんたちに恵まれ、何とかここまでやってこられたような気がします。学生一人一人の個性を伸ばしつつ、まとまりのある研究室を作りたい…。考えてみればずいぶん虫の良い話ですが、毎年6月を迎える頃にはおのずと研究室はまとまり、ホッと胸をなでおろしています。メンバー同士が過度に干渉し過ぎず、かといってお互いの存在に無頓着になり過ぎず、適度な距離感を保って自分の役割を果たすことが、組織がうまく機能するコツだと思います。自分勝手な人ばかり集まると、個々がバラバラに動いてしまい組織とは呼べなくなります。一方、自己主張しない物静かな人ばかりが集まると、採め事こそ起こりませんがその組織が何かを成し遂げることもないでしょう。

分子集積体の世界も同じかも知れません。激しく反応する分子同士を混ぜるのは危険以外のなにものでもありません。一方、安定な結晶は長期間保存できる反面、興味深い動的挙動を示してくれることもありません(例外はあるかもしれませんが)。外界からの刺激(信号)にตอบสนองする分子と、それに反応して柔軟に組織構造を変化させる分子群、これらが絶妙に組み合わせられたとき、これまでになかった特性を示す分子組織体が生まれるのだと思います。今回特集した5つの研究事例はいずれも、光や熱、圧力、電気などの外部刺激にตอบสนองする分子固有の性質と、液晶や界面活性剤など適度な分子間力で自己集積する材料をうまく組み合わせ協調させることにより、ユニークな機能が発現していることに気付いていただけかと思います。このような分子集積技術は今後ますます複雑化し、化学のみならず、数学や物理を駆使した理論体系の確立や生体模倣技術など、多くの専門知識を融合しながら発展していくでしょう。

先日、私の所属する理学部第二部の教職員で親睦を深める機会があったのですが、これからの教育研究活動は学科の垣根を越えた連携が大切になるとの話題で盛り上がりました。1人の研究者がカバーできる専門知識は限られています。本特集で見てきた分子たちと同じように、研究者同士も集まり連携して、新たな研究分野を開拓していくことが、今後ますます重要になると思います。

[青木 健一：理学部第二部]

次号予告

特集：新生薬学部

- 薬学の最高峰へ ～伝統と革新～
- 革新的次世代核酸医薬の開発
- 天然物化学から熱帯感染症治療の未来への挑戦
- “心”と“からだ”に優しい薬の開発を目指して
- 免疫システムのセーフガード“制御性T細胞”
- 薬学で創る未来の再生医療・細胞治療
- COPDや中枢神経系疾患治療に貢献するDDS研究
- くすりを育てる「育薬研究」
- 環境と健康の接点を科学する

編集委員会 編集委員

渡辺 一之	名誉教授
松田 学則	理学部第一部 応用化学科
小谷 佳子	理学部第二部 数学科
西尾太一郎	理学部第二部 物理学科
橋詰 峰雄	工学部 工業化学科
藤沢 匡哉	工学部 情報工学科
原田 陽介	薬学部 生命創薬科学科
早瀬 仁則	創域理工学部 機械航空宇宙工学科
塚本 良道	創域理工学部 社会基盤工学科
増田 信之	先進工学部 電子システム工学科
梅澤 正史	経営学部 ビジネスエコノミクス学科
佐藤 憲一	教養教育研究院 野田キャンパス教養部



北海道・長万部キャンパスの全景

SCIENCE FORUM 科学フォーラム 通巻 441 号 (創刊 1984 年 7 月)

2024 年 6 月発行 / 第 41 巻 3 号

発行人 浜本 隆之 (学校法人 東京理科大学理事長)

編集人 渡辺 一之 (編集委員会 委員長)

〒162-8601 東京都新宿区神楽坂 1-3

TEL : 03-3260-4271 (代)

<https://www.tus.ac.jp/about/information/publication/forum>



お問い合わせは、本学広報課をお願いします。

TEL : 03-5228-8107, FAX : 03-3260-5823

理大 科学フォーラム編集室 (担当：亀山 亜土、坂口 奈織美)

e-mail : henshu@admin.tus.ac.jp

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

印刷・製本 精興社

禁無断転載